

日本古典文学全集

松尾芭蕉集

井

本

農

一

松

友

次

信

夫

学館・刊

松尾芭蕉集

日本古典文学全集 41

1972年6月30日 初 版発行 ISBN4-09-657041-9
1992年10月20日 第二十一版発行

井 本 農 一

校注・訳者 堀 信 夫

村 松 友 次

発 行 者 相 賀 昌 宏

印 刷 所 凸版印刷株式会社

発 行 所 株式会社 小 学 館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

振替口座 東京8-200番

編集 3230-5141

電話(03)業務 3230-5333

販売 3230-5739

© N. Imoto N. Hori 1972 (著者検印は省略)
T. Muramatu いたしました)

■造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

■本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

目次

解説……………五

凡例……………三九

発句編
井堀 信夫 注解

例言……………四四

本文……………四五

紀行・日記編
井本 農一 校注・訳

例言……………二六四

野ざらし紀行……………二六五

鹿島詣……………三〇一

笈の小文……………三〇九

更科紀行 三二

おくのほそ道 三九

嵯峨日記 三八七

俳文編

村松友次校注・訳

例言 四〇一

一『貝おほひ』序.....	四〇三	一五 初する音.....	四二七	一六 雪丸げ.....	四三三
二『拾八番句合』跋.....	四〇四	一六 竹の奥.....	四二八	一六 閑居ノ箴.....	四四〇
三『常盤屋句合』跋.....	四〇五	一七「きぬたうちて」詞書.....	四三〇	一七 藪の梅.....	四四五
四 柴の戸.....	四〇七	一八「狂句こがらしの」 詞書.....	四三〇	一八「養虫ノ説」跋.....	四四六
五「我ためか」詞書.....	四〇八	一九 酒に梅.....	四三二	一九『続の原』句合跋.....	四四八
六「侘テすめ」詞書.....	四〇八	二〇 一枝軒.....	四三三	二〇 保美の里.....	四四九
七 独寝の草の戸.....	四〇九	二一 牡丹葎分て」詞書.....	四三三	二一 権七に示す.....	四四〇
八 乞食の翁.....	四一〇	二二 野ざらし紀行絵巻跋.....	四三四	二二 杖突坂の落馬.....	四四二
九 寒夜の辞.....	四一一	二三 三つの名.....	四三五	二三 矢としてのくれ.....	四四三
一〇 夏野画賛.....	四一二	二四 垣穂の梅.....	四三五	二四 (古郷や) 詞書.....	四四四
一一『虚栗』跋.....	四一三	二五『伊勢紀行』跋.....	四三七	二五 うに掘る岡.....	四四五
一二 歌仙の賛.....	四一四	二六 四山の瓢.....	四三九	二六 伊勢参宮.....	四四六
一三 士峰の賛.....	四一五	二七 初雪.....	四三三	二七 伊賀新大仏之記.....	四四七
一四 馬に寝て.....	四一六			二八「猶見たし」詞書.....	四四八

四「ほろ／＼と」詞書……………	四九	六〇夏の時鳥……………	四七〇	八二雲竹の賛……………	五九六
四一あすならう……………	四九〇	六一「田や麦や」詞書……………	四七〇	八三鳥之賦……………	五九七
四二高野登山端書……………	四九一	六二「野を横に」詞書……………	四七一	八四卒塔婆小町賛……………	五九九
四三「里人は」詞書……………	四九二	六三高久の宿のほととぎす……………	四七二	八五落柿舎記……………	五〇〇
四四「早苗の賛」……………	四九三	六四奥の田植歌……………	四七三	八六堅田十六夜之弁……………	五〇二
四五「夏はあれど」詞書……………	四九三	六五「かくれ家や」詞書……………	四七五	八七成秀庭上松を誉る……………	五〇三
四六湖仙亭の記……………	四九四	六六文字摺石……………	四七七	こと葉……………	五〇三
四七「やどりせむ」……………	四九四	六七「笠島や」詞書……………	四七九	八八阿弥陀坊……………	五〇四
四八句入画賛……………	四九五	六八松島……………	四八一	八九「忘梅」序……………	五〇五
四九十八楼ノ記……………	四九六	六九天有法印追悼の文……………	四八二	九〇明照寺李由子に宿す……………	五〇七
五〇鸛舟……………	四九七	七〇銀河ノ序……………	四八四	九一島田のしぐれ……………	五〇八
五一更科嬢捨月之弁……………	四九八	七一「薬欄に」詞書……………	四八五	九二雪の枯尾花……………	五〇九
五二素堂亭十日菊……………	四九八	七二「あか／＼と」詞書……………	四八六	九三亀子が良才……………	五一〇
五三芭蕉庵十三夜……………	四九八	七三温泉ノ頌……………	四八九	九四栖去之弁……………	五一三
五四枯木の杖……………	四九八	七四「さびしげに」詞書……………	四九〇	九五芭蕉を移す詞……………	五二三
五五「其かたち」詞書……………	四九八	七五敦賀にて……………	四九一	九六机の銘……………	五二七
五六越人におくる……………	四九八	七六紙衾ノ記……………	四九二	九七三聖図賛……………	五二八
五七深川八貧……………	四九八	七七明智が妻……………	四九四	九八僧専吟餞別之詞……………	五二九
五八「曠野集」序……………	四九七	七八少将の尼……………	四九五	九九許六離別の詞……………	五三〇
五九「草の戸も」詞書……………	四九八	七九洒落堂記……………	四九七	一〇〇許六を送る詞……………	五三三
六〇「秣負ふ」詞書……………	四九八	八〇重ねを賀す……………	四九八	一〇一「弔」初秋七日ノ雨星……………	五三四
六一秋鴉主人の佳景に対す……………	四九九	八一幻住庵記……………	五〇〇	一〇二閑関之説……………	五四五
		八二四条河原涼……………	五〇〇	一〇三悼松倉嵐蘭……………	五五七

一〇四 東順の伝	五九	一〇六 「稲づまや」詞書	五三	一〇八 杵折の賛	五四
一〇五 素堂菊園之遊	五一	一〇七 笠はり	五三	一〇九 塔山送別	五五
参考異文集	五七				

付 録

出典俳書一覧	五三
松尾芭蕉略年譜	五七
季語別索引	五九
初句索引	六三

口 絵 目 次

奥の細道屏風	1	「餅を夢に」「ふる池や」短冊	9
芭蕉翁像	5	素龍本おくのほそ道	10
「みどころも」自画賛	6	柿衛本・曾良本おくのほそ道	11
「あか／＼と」自画賛	8	乞食の翁・幻住庵記 真蹟	12

解 説

一 芭蕉の生涯と文学

名古屋から国鉄関西本線に乗ると、急行で二時間半もかからないうちに、「柘植」という駅に着く。その次の駅が「伊賀上野」である。汽車が駅を出ると間もなく、左手の丘の上に上野城の天守閣が遠く見える。天守閣は近年の再建だが、城址の高い石垣は、慶長十七（一六三三）年ごろ、藤堂高虎が築いたものである。藤堂家は、三十二万石余を領する国持ち大名の雄藩で、伊賀十萬石余を治めるために、伊賀国の中心地上野に城代家老が置かれていた。

芭蕉は寛永二十一（一六四四）年に生まれた。芭蕉の父、松尾与左衛門の家は、代々柘植の旧家で、無足人級（一種の郷士の家であったという。芭蕉の出生前か、出生後かはわからないが、城下町の上野に出て農人町（いまの赤坂町）に住み、中流程度の生活を営み、芭蕉が十三歳の時に没した。したがって芭蕉の生地は、柘植か、上野かわからないが、芭蕉が上野を故郷と感じていることは、芭蕉の書きのこしている文によって察せられる。父は亡くなったが、兄半左衛門の継いだ家があり、少年時代の思い出につながる土地を故郷と感ずるのが、自然の情であろう。中流程度の生活といったが、中流の上の部まではいかなかったであろう。十三歳で父を失ったが、母は健在で、兄半左衛門が家を継ぎ、父を失ったとしても路頭に迷うようなことはなかった。兄のほかに姉が一人、妹が三人あった。芭蕉の門人土芳の『蕉翁全伝』によれば、芭蕉は「金作・半七・藤七郎・忠右衛門ト云、後に甚七郎（ト）変名ス」とあり、後に藤堂新七郎家へ仕えてからは宗房と名乗った。ここで俳号について述べておくが、最初は宗房を音読して用いたといわれ、三十二歳ご

ろから桃青を用い、これは芭蕉号とともに長く用いられた。芭蕉の俳号は、三十八、九歳ごろからで、俳書に芭蕉号が出てくるのは天和二(一六八二)年(三十九歳)からである。そのほか、二十歳代で釣月軒、三十五歳の『十八番発句合』の跋文に「坐興庵桃青」と署して「素宣」の印を用い、三十七歳九月の『常盤屋句合』の跋文には「華桃園」、同年冬に移り住んだ深川の草庵には「泊船堂」と庵号を付けた。またこのころ「棚々斎花桃天」と署したこともある。そのほか、天々軒・芭蕉洞・風羅坊・土羹・杖銭・鳳尾・羊角・羽扇などが、庵号・別号または印記として用いられた。

芭蕉は長じて藤堂新七郎家に仕えた。同家は藤堂藩の伊賀付き士大将の家で、代々新七郎を名乗り五千石を領していた。当時は二代目の藤堂新七郎良精(延宝二(一六五四)年没)の代で、芭蕉が仕えたのは、その嗣子主計良忠である。芭蕉より二歳の年長であった。出仕の年齢には諸説があるが、十九歳が通説であろう。十九歳出仕説をとれば、出仕以前に北村季吟について俳諧を学び、その縁によってすでに季吟について俳諧を学んでいた良忠すなわち俳号蟬吟に召し出された、という説も可能である。菊岡沾涼はその著『綾錦』(享保三(一七二〇)年刊)の中に「菊岡随性軒如幻導而入季吟門」と記し、また別に「故翁は伊賀の産にして、予と国を同うす。誠や祖父菊岡如幻は翁を北村法印へ渡せる橋の縁ありぬ(伊賀産湯)とも記す。菊岡如幻、すなわち菊岡行宣は上野福居町の富裕な町人で、町人ながら『世諺一統』(百五十巻三百冊、元禄十一(一六九六)年成、七十四歳)を始めとして『伊乱記』『伊水温故』『茅栗草子』『岡八幡縁起』『岡崎物語』等多数の著述があり、また北村季吟について和歌をよくした。元禄十六年五月七日没。享年七十九。沾涼すなわち菊岡房行は、行宣の子行尚の養子である。行宣の没した時、沾涼は十八歳であった。祖父から芭蕉についての直話を聞く機会がなかったとは言えない。

ともかく芭蕉は良忠に仕え、良忠(俳号蟬吟)とともに俳諧に励んだ。上野の町に、季吟系の貞門俳諧に遊ぶ町人たちがあったことは、季吟編(実際は長子の湖春編)の『続山井』に、上野の連衆の句が多数収録されていることによって察し得る。それらの人々が、折にふれ良忠に召されて、芭蕉とともに連句の会席を持ったことは、今日伝存する「貞徳翁十三回忌追善俳諧」の作者中に、正好(窪田

六兵衛政好か）・一笑(保川弥右衛門)・一以(松木氏)などの名が見えることによっても明らかである。

今日制作年次のわかる芭蕉最古の作品は、寛文二(癸卯)年芭蕉十九歳の冬之作である。発句編の注などで明らかのように、「年内立春」という『古今集』以来の素材を扱った「廿九日立春ナレバ 春やこし年や行けん小晦日 宗房」(千宜理記)という句であって、この素材は貞門俳諧でもしばしば詠まれており、芭蕉の作品がとくに出色であるとは言えない。このうち芭蕉の作品は、蟬吟の作ともにもまず寛文四(癸巳)年刊の重頼編『佐夜中山集』に掲げられ、以後も貞門の俳書に散見するようになるが、貞門諸家の作品に比し、格段に出色であると言いがたい。

日常生活としては、良忠の家の台所御用人をしたり、近侍役をしたりしながら、一方では蟬吟の俳諧の相手をして、当時の貞門俳諧の水準なみの句を作っていたのが、芭蕉が十九歳から二十三歳までの生活であったとみてよいであろう。ところが、芭蕉が二十三歳(寛文六(癸亥)年)の四月二十五日、良忠は病没し、良忠の弟で当時十八歳の良重が嗣子に定められた。芭蕉はやがて致仕し、兄の家にもどった。旧説のような、致仕を願い出たが許されず、脱藩して京に出奔したとする説は、近年はまったく顧みられない。京に折に出て、季吟および季吟門の人々と接触したことはあるが、京に定住した形跡がなく、逆に依然として伊賀の上野が本拠であったことを示す証跡が顕著である。すなわち、寛文六年から十二年ごろまでの間に、芭蕉の作品を収録した『続山井』や『如意宝珠』『大和巡礼』『藪香物』等の作者名の肩書は、いずれも「伊賀上野」「いが上野松尾氏」「伊賀松尾氏」「伊賀上野住」などであって、肩書に京住を示すものは一つもない。芭蕉は、兄の家にあって、俳諧を作りながら、将来への模索を続けていた。この間、自分の将来について煩悶や焦燥がなかったはずはない。無理解な兄ではなかったから、折々京へ出るぐらいの小遣いはもらえたが、分家して財産を分け与えられるほど裕福な家ではない。芭蕉の俳諧への傾斜は、だんだん深まっていた。

寛文十二(壬午)年、二十九歳の正月二十五日、芭蕉は発句合『貝おほひ』を、上野の天満宮に奉納した。流行歌謡やはやり言葉を

縦横に駆使した、斬新な発句合である。その年の春、芭蕉は江戸に出た。漫然と江戸に出たのではなく、俳諧をもって世に立とうとする意図の下に出府したとみたい。親類・縁者の後援を得て、計画を立てて出府した。江戸船町の名主で、俳諧にもたしなみのある小沢卜尺や、魚問屋の杉山杉風には在郷中から手づるが求めてあった。

折から俳壇に新風（談林風）が吹こうとしており、江戸の俳壇もたちまち談林化していった。芭蕉もその中で談林風の俳諧を作り、江戸出府後二、三年のうちに、俳壇にある程度の地歩を得た。其角の芭蕉入門が延宝初年であり、嵐蘭の入門が延宝三（三）年（芭蕉三十二歳）であることは、それを証している。延宝四年、三十三歳の春には、山口信章（素堂）と両吟で天満宮奉納百韻一卷を興行し、三月に『江戸両吟集』と題して刊行している。同年六月二十日ごろ上野に帰郷して三つの句会に出席し、京にも出、父を失った甥の桃印（当時十六歳）を伴って江戸にもどっていることは、江戸における生活に目途がついたことを意味しよう。三十四、五歳のころには、俳諧宗匠の立机興行もすませ、新進の宗匠として、門人を擁し盛んな活躍をする。延宝六、七年に江戸で刊行された主要俳書のはほとんどすべてに芭蕉の作品が相当数収録されている。六年三月中旬には京都で『江戸三吟』（桃青・信徳・信章との三百韻）が刊行され、それはさらに江戸でも、前々年の信章との天満宮奉納両吟二百韻を付録にして『桃青三百韻付両吟二百韻』と題して刊行された。信徳・信章らとの連句であるのに『桃青三百韻』と題されていることに注意したい。概して談林風の、明るい、奇知縦横の作品が多い。翌延宝七年、三十六歳の春の「阿蘭陀も花に来にけり馬に鞍」などによってもその一斑は察せられよう。

二十九歳で江戸に出て、二、三年で俳壇に頭角を現わし、三十四歳から三十六、七歳ごろまで、新進の俳諧宗匠として盛んな活躍を示す。それは、俳壇全体としてみれば、談林俳諧の全盛期である。俳諧人口は増大し、俳諧宗匠の職業的地位は安定する。芭蕉の宗匠としての成功も、談林俳諧の流行、俳諧人口の増大という背景によるところがあらう。しかし、延宝末年になると、談林俳諧に行きづまりがくる。談林派が俳壇を制覇したのは、読者の意表をつく新奇さ、無心所著のおかしみが、貞門派の陳腐と平板を圧倒したところにある。常に意表をつき続けるためには、新しい趣向が次々と考案されなければならない。しかし、古典や故事のもじりも

だんだん種が尽きてくる。斬新を生命として貞門派を圧倒したが、それだけに、斬新さが失われれば急速に凋落する。談林派の総帥といわれた西山宗因が「なんにもはや楊梅の実むかし口」と詠んで、俳諧に遠ざかりはじめたのは、延宝八(交)年ごろからである。延宝の末年から天和初年へかけて、いままで談林風に熱中していた俳諧師たちは、酔いがさめたようにさらに別の方向を求めて暗中模索する。大坂談林の雄、井原西鶴が浮世草子の第一作『好色一代男』に筆を染めたのも、天和初年のことである。

延宝八年、三十七歳の冬、芭蕉は日本橋に近い小田原町から去って、隅田川の向こう岸深川の地に退隠する。華やかで、おもしろい俳諧宗匠の生活から身を引いて、隠者になろうとする。延宝九年、三十八歳の正月を草庵に独り迎えた芭蕉は「餅を夢に折結齒朶の草枕」の句の詞書に「元朝心感有」と書く。この句の別の真蹟には「思ひ立つ事の有る年」と前書があったよしだが、芭蕉にとって延宝九年(三十八歳)の正月は、万感こもごも至る思いであつたに相違ない。世間通俗の宗匠生活を続けようとするれば一応道は容易である。家庭を持ち、小市民的幸福をつかもうとすれば、それも不可能ではない。しかしそれでは、真の芸術は得られない。宗匠生活を捨てて、純粹に生きようとすれば、きびしい人生を覚悟しなければならない。芭蕉はあえて後者の道を選んだ。

深川大工町の臨川庵に仏頂和尚を訪い、禅を修したのも、深川退隠後間もないことである。一介の俳諧師の身で禅に志すのは異例なことである。芭蕉の転回が、延宝八年の後半から、九年にかけて始まったことは、もはや明らかであろう。そのことは作品によってみても明らかで、読者は本書発句編のそのころの句を想起されたい。また、俳文編「柴の戸」「独寝の草の戸」「乞食の翁」「寒夜の辞」などを読みかえされたい。「櫓声波を打てはらわた氷る夜や涙」の一句によっても、深川退隠前の遊戲的俳諧との差は明らかではないか。もちろん、そこには中国の古い詩人たちの影響がある。隠者的・文人的ポーズがある。だがそのような姿勢によって、芭蕉は世間の俗流に抵抗し、しだいに自分本来のものをつかんでゆくのである。転回は悩みと迷いの中で進んだが、これを要約して言えば、まず生活のための文学から、文学のための生活に変わり、さらに文学と生活との一体化が、生活を文学化することによって

志向されたことであろう。文学への自己献身によって、生活の文学化がなされる。

深川への退隠は、現世的な意味では敗北であり、失意である。だが消極的な無為の隠者ではなく、世俗からの退隠が芸術・文学への絶対的献身につながってゆくことにおいて、それはかえって人生に対する積極的姿勢である。その姿勢を芭蕉は「風狂」といい、自ら風狂の人たることを志した。当然作風の大転換がある。そうして、そこから蕉風がようやく始まるのだ。

天和二（一六八二）年（三十九歳）歳末の江戸大火で、深川の芭蕉庵は類焼し、芭蕉は甲州（山梨県）に流寓し、江戸にもどったのは翌年五月ごろである。現実生活での敗残の思いは濃いが、風狂の人たる自得の念はようやく定まってきた。翌貞享元（一六八四）年（四十一歳）秋、江戸を立て帰郷の途についた芭蕉の心境には、風狂の体现者として、「風狂」という錦を着た帰郷であるという思いがあったのであるまいか。この旅の記はのちに『野ざらし紀行』として執筆されたが、全体に風狂への沈潜がうかがわれる。

この旅行から江戸にもどった以後の数年間は、心境的にも、生活的にも、一応の安定をみたといえよう。当時の世間の目から見れば俳諧師は「遊民」である。役者は「河原者」である。だが芭蕉に対しては、世間通常の俳諧師とは違った、高雅隠逸の詩人としての評価が定まりつつあった。門人も陸統とふえ、しかも質のよい門人がふえた。旦那芸の門人でなく、文学にまじめな気持を持つ門人がふえ、芭蕉を心から尊敬する門人がふえた。芭蕉はいよいよ風雅三昧の生活にうちこんだ。生活即俳諧となり、芸術と生活とが一体化されているさまは、たとえば本書俳文編「雪丸げ」「初雪」「閑居ノ箴」などを一読されたい。貞享四（一六八七）年（四十四歳）の秋、中秋の名月を賞でようと鹿島へ旅をして『鹿島詣』を草したのも、風雅三昧の生活の中からである。その年十月、盛んな壮行会のうち、帰郷を含む、西上の途についたのも、同様である。だからこの旅の門出には、前回の『野ざらし紀行』の旅の門出のような緊張感はない。餞別の類も多く、見送りの盛んで、芭蕉自身「ゆへある人の首途するにも似たり」と書いているほどである。江戸における芭蕉の地位と名声とを見るべきであろう。旅に出ても各地の門人に迎えられ、次々と俳席を重ねながらの名士の旅である。「此間美濃・大垣・岐阜のすぎもの、とぶらひ来りて、歌仙あるは一折など度々に及」(笈の小文)などあることによって、その旅の様子

が察せられよう。また愛寵^{あいちゆう}の門人杜国^{とこく}を供に、郷里から吉野・高野^{こうや}・和歌の浦・奈良・須磨^{すま}・明石^{あかし}・京と遊歴した旅は、いかにも楽しげである（これらの旅の記のちに『笈の小文』となる）。京から大津・岐阜・名古屋・熱田・鳴海などを、四か月余りも漂泊するが、これは漂泊の旅というよりも各地の門人に歓迎され、自分の抱懐する蕉風の教えを教化・宣揚する名士の旅に近い。この旅行全体に一種の平安の気が流れ、風流自足の趣が深く、門人指導、蕉風宣揚の機会の多い旅であったことは否定できないところである。この旅行が、蕉風の拡大や門人の増加に貢献した意義は大きい。また楽しい旅でもあった。だが、この旅の終りごろから、芭蕉は自己の詩人的活動の停滯を——教師としてではない芸術家としての活動の停滯を、ひそかに自覚し始めたのではあるまいか。門人のいない地方を歩こうと、岐阜から信州更科^{さらな}の月見を志したのは、そのあらわれの第一歩であろう。すでに大津にいた時から、芭蕉の胸中に更科の月見は企図されていた。そうして辺鄙^{へんび}な木曾路^{きそじ}を歩いているうちに、こういう旅こそが詩人の魂を養うものであることに気がつき、それが翌元禄二（一六九一）年春の『おくのほそ道』旅行につながってゆくのではあるまいか。

元禄元年八月下旬に、ほとんど一年ぶりに江戸にもどって来た芭蕉を、人々は次々と訪問し、俳事は多忙で、いわゆる有名人の日常のごとくである。だが、芭蕉の心中には、ある物思いが絶えなかった。「此冬^{このふゆ}は物むつかしく句も不出候^{いだしなす}」（尚白宛書簡）と十二月五日に書き、年を越してから「去年の秋より心にかゝりておもふ事のみ多ゆゑ……」（推定猿蓑^{えんすい}宛書簡）と書いている心中を、自分の文学の停滯とその打破の工夫とに結びつけて考えるのはこじつけであろうか。そうして、その工夫が奥羽・北陸旅行への計画となったと考えたいのだが、無理であろうか。知名人となり、風雅の生活に自足してきたこの数年の間に、いつの間にか生じた文学上の停滯を、門人のいない、辺鄙な地方への淋しい旅の中で、もう一度考えなおしてみたいと芭蕉は考えたのではないか。

この旅行で芭蕉がまず心がけたことは、日本の古来からの文学伝統に心を潜めることである。名所・旧跡・歌枕^{うたせくら}を丹念に歴訪し、これを批判的に見るのではなく、その持つ古典的世界にすなおに心をゆだねようとしている。いわば伝統への絶対的随順であり、自

己否定である。だが芭蕉が丁寧^{ていねい}に尋ね歩いた歌枕・旧跡の多くは、長い時間の圧力に抗しかねて、昔の面影を十分には残していなかった。芭蕉は人間の営みのもろさ、人工的なもののはかなさについて嘆かずにはいられなかった。壺碑^{つぼいし}の一条、平泉・中尊寺の一条（ともに『おくのほそ道』参照）にはそのことが端的に述べられている。古典的世界に沈潜^{ちんせん}し、能因^{のういん}を思い、西行^{さいぎやう}を慕い、日本の文学や文化を生んだ人々を懐かしみ、その心に触れ合うことを強く望みながら、また一方で伝統と現代について考えながら芭蕉は旅を続けた。そうして奥羽山脈を越え、羽黒山に八日間滞在している間に、不易流行^{ふえきりゆうこう}の考え方を口に出して言いはじめた（聞書七日草）。不易流行論は、芸術の根底には一貫して変わらないものがある、だがその表われ方は時代により常に変化流行してやまないものであり、変化流行することが、芸術の根底にある一貫するものを真に表現することだという考え方である。その考え方は、『おくのほそ道』旅行前の自分の俳諧の停滞を打破する問題にもつながるところである。

元禄二年八月下旬、大垣に着いて、この『おくのほそ道』旅行は終わった。だが芭蕉の旅がそれで終わったわけではない。芭蕉は、大垣から伊勢を経て郷里にもどったが、それから元禄四年十月末江戸にもどるまで、上野・京・湖南その他の地方に漂泊し、その間に新しい俳風の開拓につとめてやまない。去来が「故翁、奥羽の行脚^{あんきやく}より都へ越えたまひける、当門の俳諧すでに一変す」（贈晋氏其角書）というように、大きな転回がこの旅行を契機にして動き出したのである。不易流行の哲学に立ち、いままでの古臭い風流の觀念、固定した情感を捨てて、新しい目で、新鮮な情趣を発見し、これを具体的・具象的に、日常の場面としてつかまなければならぬ。伝統を踏まえ、古人を尊敬するが、風流の因襲化を強く排斥し、時代に従って流行し、「新しき」を責めることを至上命令とする。風流が固定化した時、それは「重み」であり、「甘み」である。「重み」を排撃し、その対極である「軽み」を追究しなければならぬ。「軽み」の追究が、元禄三年以後没するまでの芭蕉の俳諧の中心課題である。「軽み」の追究によって芭蕉は、元禄元年ごろの自分の文学上の停滞を打破し、新しい指導理念によって一門を導いていった。その成果の一つが元禄四（一六九〇）年七月刊の『猿蓑^{さるみの}』である。そこには、元禄三年ごろに芭蕉を慕って入門してきた、才能のある門人たちの、潑刺^{はつちやく}たる作品も見られる。去来が「猿蓑は新風

の始はじめ」(去来抄)と言うのは、去来が編者であるからの言葉だとしても、まだ入門早々で一句の入集にゅうしゅうもない支考しこうが、後のことではあるが「猿蓑集に至りて全く花実を備ふ。是を俳諧の古今集ともいふべし」(俳諧発願文)と言ひ、文章じやうそうが跋文はつぶんに「猿蓑者芭蕉翁滑稽之首しゆ諠也」と言うのは、文飾はあるとしても肯定される。これを同年刊の他門の俳諧撰集と比べれば、その差は一層明瞭であらう。

不形なる棕を妹が喰はせけり

大坂由平(蓮の実 梅盛門の賀子編 元禄四年の自序)

棕結ふかた手にはさむ額髪

芭蕉(猿蓑)

ことしもまた梅見て桜藤紅葉

大坂西鶴(蓮の実)

炭捨て白梅うるむ垣ねかな

凡兆(猿蓑)

付そひて妻は出ぬか鉢たゝき

淵瀬(団袋 西鶴門の団水編 元禄四年刊)

鉢たゝき来ぬ夜となれば臃なり

去来(猿蓑)

元禄二年の秋に『おくのほそ道』旅行をおえて、そのあと元禄四年秋までの上方滞在中に、芭蕉は俳諧に新しい作風を工夫し、門人たちを新風に指導し、一方『笈の小文』の執筆を進めては「造化にしたがひ、造化にかへれ」との文学論や、「黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ」の紀行論を展開し、また「幻住庵記」を書いて俳文の範を示すなど、きわめて活発な文学活動をした。それらの跡は、本書本文に掲げた諸作に直接あたられたい。

元禄五年、四十九歳の正月を、芭蕉は久しぶりに江戸で迎えた。実はもっと早く江戸へもどる予定だったが、『おくのほそ道』旅行出立にあたり、芭蕉庵を売り払って旅費にあてたため、帰るべき家が江戸になかったのが延引の理由である。五十歳も迫っているのに、財産もなく、家もなく、妻もなく、子もない。風雅に身をささげた半生の代償として得たのは、乞食同然の境界ではないかという自嘲が、芭蕉の胸中に湧いた。橘町(浜町にて越前殿上り屋敷跡新地)の借家に年を越して、芭蕉は「栖去之弁」を書き、「なし得

たり、風情終に孤をかぶらんとは」と結ぶ。だが、五月になると新芭蕉庵も落成し、俗俳の流行の中で、しかし高踏別格の俳人としての芭蕉の名声は高く、門人の来訪や俳事も多かった。八月三日から満月の十五夜までの間、芭蕉庵を訪れた人々は、今日わかるだけでも三十余名に及ぶ(三日月日記)。九月から年末までの間に、今日わかる連句会だけでも十一回に及ぶ。十二月三日付許六宛芭蕉書簡によると、許六の芭蕉庵訪問の申入れに対し、八日から十七日まで十日間の中で、在宅が確実なのは十三日だけである。多忙の様子が察せられるであろう。多忙ではあるが、芭蕉を理解する熱心な門人に取り巻かれることは、一面芭蕉にとっても俳諧の上での工夫をさらに進める結果となった。それは「軽み」を一層積極的に推し進めることであった。作者の観念を露骨に詠んだり、古歌や故事をもとにして作るようなことは「甘み」として排斥され、日常性の中に素材をつかみ、平明卑近の中に高雅な情を述べることで目標とされた。一方、三年前の旅行を材料に『おくのほそ道』の執筆が進められつつあった。おそらく翌元禄六年の初夏のころまでに、ある程度の草稿が成ったものであろう。

元禄六年の正月の歳旦吟は「年／＼や猿に着せたる猿の面」である。同じようなことをくり返して、今年もまた新年を迎えたが、人生五十という、その五十歳にもなっているという悔いが、芭蕉の胸中を去来したものであろうか。ところで、芭蕉が十七年前の延宝四(一六五二)年に、郷里から甥の桃印を連れて来たことは前述したが、今年三十三歳になり、芭蕉の猶子となっていた桃印は、かねて病んでいた結核が、この年一月ごろから重くなり、三月下旬没した。芭蕉は看病に心を砕いていただけに、落胆はなほだしいものがあり、「花の盛、春の行衛も夢のやうにて暮」らした(荊口宛書簡)。とはいうものの、四月下旬には有名な「許六離別の詞」(柴門ノ辞)を草し「予が風雅は夏焔冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし」と書くなど、俳事を廃することはできなかった。一方、かつて別れた女の寿貞(尼号)が、まさ・ふう・次郎兵衛の三人の子供まで連れて、芭蕉の世話になりに来た。その年の夏はきびしい暑さだった。芭蕉は健康もすぐれぬまま、盆過ぎから約一か月、「閉関」を宣言し、客を断わって、草庵に閉じこもった。閉関を解いてのちは、俳席は以前にもまして多かった。来客も次々とある。寿貞たちは近所に住まわせ、次郎兵衛は走り使いに使った。『おくのほそ道』が